

長安西明寺の類聚編纂書のオントロジとその受容 —『諸経要集』述意縁・『法苑珠林』述意部と『三宝絵』上巻の構成—

藏中 し の ぶ

1. 長安西明寺の学僧とその著作

仏典における和漢古典学のオントロジモデルを構築するにあたって、まず、範囲を限定したい。

第一に「和」に関しては、奈良朝の仏教的な漢詩文から平安朝の仏教説話にいたる系譜とする。

奈良朝の仏教的な漢詩文の出典は、長安西明寺の学僧の著作に顕著な偏りがみられる。それは、奈良朝の仏教的な漢詩文生成の場が、東大寺建立以前には国内最大規模を誇る官大寺であり、渡来僧が数多く止住した平城京の大安寺を核とする寺院間の人的ネットワークにささえられていたためであり、そこに長安西明寺の学僧の著述が大きな影響をおよぼしたためにほかならない(1)。

そこで第二に、「漢」に関しては、初唐の仏教文学を代表するこれら長安西明寺の学僧の著作を対象とする。

高宗の命を受けた玄奘を中心として、創建当初の西明寺には、「大徳五十人」が入寺した。『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』(以下『慈恩伝』と略称)巻十には、西明寺の落慶なるや、五十名の大徳と各々侍者一名を西明寺に住ませ、百五十名の童子を新たに得度させ、七月十四日には僧侶等が西明寺に入寺したことが記されている。

勅先委所司簡大徳五十人侍者各一人。後更令詮試業行童子一百五十人擬度。至其月十三日、於寺建齋度僧。命法師看度。至秋七月十四日、迎僧入寺。(大正蔵／第五〇巻 275 c)

この「大徳五十人」の名は未詳ではあるが、道宣・神泰・懷素・道世・圓測・玄則・恵立・静之・法雲ら、名だたる学僧がふくまれていたことが推測される(2)。長安西明寺の知的体系を把握するためには、このほか、西明寺にかかわる学僧、さらにはその法統につらなる弟子たちの教学や著作をも視野にいれるべきことはいうまでもない(3)。

なかでも代表的な学匠が、玄奘・道宣・道世である。彼らの訳出經典・著作の数は、ほぼつぎのとおりである。

- (1) 玄奘(六〇二～六六四)の訳出經典七六部一三四七巻。
- (2) 西明寺上座道宣(五九六～六六七)の著作三五部一八八巻。
- (3) 道宣の法弟道世(?～六八三)の著作十二部一五六巻。

表1は石田茂作氏「奈良朝現在一切經疏目錄」に掲出された玄奘の訳出經典、道宣・道世らの著作を年代順に並べ替えたものである。この表からも、長安西明寺の学問・知的体系が奈良朝に確実に伝来し、平城京において經典の書写・奉請というかたちでさかんに享受されていたことが確認される。

★表1 石田茂作「奈良朝現在一切經疏目錄」にみえる玄奘の訳出經典、道宣・道世の著作

西明寺の上座・道宣(五九六～六六七)とその法弟道世(?～六八三)の著作は、相互にきわめて有機的な関係をもつ。

藤善眞澄氏は、道宣『集神州三寶感通錄』(以下『感通錄』と略称)の内容の多くが、道世『法苑珠林』に抄出され、完全に同文もみえること、道宣が『感通錄』で意を尽くせなかった部分は、すべて道世が新たに撰する『法苑珠林』百巻に託すことを明記していることを指摘された(4)。

『感通録』末尾にはつぎのようにあり、道宣は道世が準備を進めていた『法苑珠林』の内容を熟知しており、道宣と道世は原史料を共有していたことが知られる。

予以麟德元年夏六月二十日、於終南山北鄠陰之清宮精舍集之。素有風氣之疾、兼以從心之年、恐奄忽
沆露、靈感沈沒。遂力疾出之直筆、而疏頗存大略而已。庶後有勝事、復寄導於吾賢乎。其余不尽者、
統在西明寺道律師新撰『法苑珠林』百卷内具顯之矣。 (大正藏二一〇六／第五二卷 435 a)

予、麟德元年夏六月二十日を以て、終南山の北、鄠陰の清宮精舍に於て之を集む。素より風氣の疾有
り、兼ねて從心の年を以て、奄忽に沆露し、靈感の沈没せんことを恐れ、遂に疾を力して之を出す。
直筆して疏したれば、頗る大略を存するのみ。其の余の尽さざる者は、統べて西明寺道律師の新撰『法
苑珠林』百卷の内に在りて、具さに之を顯かにす。

また、道宣は自著に対して、律書の重修や『続高僧伝』の追補など、貪欲なまでに加筆補正をくり返して
おり、道世も同様に『諸經要集』を増補して『法苑珠林』を編纂している。藤善氏は『諸經要集』はもちろ
ん、『法苑珠林』もまた、西明寺菩提院の一切經を読んで撰述編纂されたとし、道宣撰『大唐内典錄』が西
明寺の經藏管理の副産物であったと同様、道世撰『諸經要集』二十卷、『法苑珠林』百卷もまた、西明寺の
一切經入藏によって成立したとされる(5)。

本稿は、仏典における和漢古典学のオントロジモデルを構築するにあたって、まずは影響関係の確認され
るこれら長安西明寺の知的体系に視座をとり、『諸經要集』『法苑珠林』のオントロジの受容のされかたを『三
宝絵』上巻に即してあきらかにすることを目的とする。

2.『三宝絵』と「薬師寺仏足石記」の出典

これら長安西明寺の知的体系のオントロジが、日本の仏教文学に影響をおよぼしているひとつの例に、永
観二年(九八四)源為憲撰『三宝絵』上巻がある。

『三宝絵』上巻序は、仏涅槃後の奇瑞として、仏足石をめぐる毒龍と悪王の説話を引く。

涅槃よりこのかたも奇しく妙なること多かり。石屋の中に景をとどめたまへるは、毒龍まばてつねに
忍び、石の上に跡を遺したまへるは、悪王削れどもうせず。

前半の毒龍の出典について、岩波新大系『三宝絵』頭注はつぎのように注し、

釈尊が石洞の中に仏の影像を残したので、これを拝んだ毒龍は毒心おこる度にこれを見つめて悪心を
抑え忍んだ。大唐西域記二に拠る。今昔物語集三ノ八にも見える。

後半の悪王の出典については「大唐西域記八に拠る」として、『大唐西域記』をあげる。

後半部にみえる仏足石を削ろうとした悪王の記事は、天平勝宝五年(七五三)七月、文室真人智努(文室
浄三)が亡妻・茨田女王の追善のために建立した「薬師寺仏足石記」にも引用されており、おなじ記事を収
録する文献に、長安西明寺の知的体系を共有するつぎの四書がある(6)。

『大唐西域記』卷第八摩揭陀國上 (大正藏第五一卷 911 c)

『釈迦方志』卷下遺跡篇第四之余 (大正藏第五一卷 961 b)

『法苑珠林』卷第二九感通篇第二一聖迹部第二 (大正藏第五三卷 502 a)

『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷第三 (大正藏第五〇卷 236 a)

★表2「藥師寺仏足石記」の出典

「藥師寺佛足石記」	『大唐西域記』	『釈迦方志』	『法苑珠林』	『慈恩伝』
<p>案『西域傳』云、 今摩揭陀國、</p> <p>昔阿育王方精舍中、 有一大口。 有佛跡。 各長一尺八寸、 廣六寸。 輪相・ 花文、十指各異。</p> <p>是佛欲涅槃、</p> <p>北趣拘尸、 南望王城、 足所蹈處。</p> <p>近為金耳國商迦口、</p> <p>不信正法、 毀壞佛跡。</p> <p>鑿已還生、 文相如故。 又捐□□中、 尋復本處。 今現圖寫、 所在流布。</p>	<p>摩揭陀國上</p> <p>窣堵波側不遠精舍中 有大石、 如來所履變迹猶存。 其長尺有八寸、 廣余六寸矣。 兩迹俱有輪相、 十指念[皆]帶花文、 魚形映起、 光明時照。 昔者如來將取寂滅、</p> <p>北趣拘尸那城、 南顧摩揭陀國園、 蹈此石上、告阿難曰、「吾今最後留 此足迹、將入寂滅、顧摩揭陀也」。 百歲之後、有無憂王。命世君臨、 建都[毘琉璃]此地。匡護三寶、役使 百神。及無憂王之嗣位也、遷都築 邑、掩周[園]迹石。既近宮城、恒親 供養。後諸國王、競欲拳帰、石雖 不大、衆莫能転。 近者設賞迦王、</p> <p>毀壞佛法、 遂即石所、欲滅聖迹。 鑿已還平、 文彩[剥]如故。 於是捐棄[憍伽]河、 尋復本處。</p>	<p>摩揭陀國</p> <p>其側精舍中、 有大石。 *1 長尺八、 廣六寸。</p> <p>是佛欲涅槃、</p> <p>北趣拘尸、南 顧摩揭。 故蹈石上之雙跡也 *1。</p> <p>近為羯羅拏蘇伐 剌那言金耳國、 設償迦王言月也。 毀壞佛跡。</p> <p>鑿已還平、 文采[剥]如故。乃 捐[憍伽]河中、 尋復本處。</p>	<p>又從南行百五十 里、度[憍伽]河、至 摩揭陀國。 其側精舍中、 有大石。 *1 長尺八寸、 廣六寸。 *2 輪相・華文、 十指各異。</p> <p>是佛欲涅槃、</p> <p>北趣拘尸、南 顧摩揭。 故蹈石上之雙足 迹*1*2。</p> <p>近為惡王金耳、 毀壞佛迹。</p> <p>鑿已還平、 文采如故。 乃捐[憍伽]河中、 尋復本處。 貞觀二十三年有 使、圖寫迹來。</p>	<p>次有精舍、舍中有 如來所履石。 石上有佛雙跡。 長一尺[剥]八寸、 廣六寸。 兩足下有千輻輪相、 十指端有萬字花文 及瓶・魚等、 皎然明著。 是如來將入涅槃、 発吠舍釐至此。</p> <p>於河南岸大方石上 立、顧謂阿難、「此 是吾最後、望金剛 座及王舍城、所留 之跡也」</p>

これら「薬師寺仏足石記」の出典四書は、いずれも長安西明寺の玄奘・道宣・道世にかかわる著作である。

貞観二十年（六四六）玄奘訳・弁機撰『大唐西域記』十二巻（大正蔵二〇八七／第五一卷）

永徽 元年（六五〇）道宣撰『釈迦方志』二巻或三巻（大正蔵二〇八八／第五一卷）

麟徳 元年（六六四）慧立本・彦惊箋『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』十巻（大正蔵二〇五三／第五〇巻）

総章 元年（六六八）道世撰『法苑珠林』一〇〇巻（大正蔵二一二二／第五三巻）

第一に、貞観二十年（六四六）に成立した玄奘訳・弁機撰『大唐西域記』十二巻は、太宗の命により玄奘の西域行にもとづいて、弁機が綴文編集した地誌である。編纂に際して、玄奘は原史料を弁機に提供したとされ、玄奘が西域・天竺で親しく遊歴し、あるいは伝聞してきた天竺・西域一三八カ国、附記十六国の地理・風俗・言語・伝説・仏教流伝の状況のほか、都邑・堂塔・仏教の聖跡などを記述する。

第二に、道宣の著『釈迦方志』二巻は長安西明寺の類聚編纂物のひとつである。永徽元年（六五〇）の撰になり、仏教流伝の時期や地域、中国への仏教東流の概略を八篇にわたって述べたものである。とくにその遺跡篇は中国から天竺にいたる東中北の三路をあげ、北道として『大唐西域記』巻一所載の玄奘の往路と仏跡、中道として同第十二の玄奘の復路を述べるため、地誌『大唐西域記』にも類する体裁をとる。

第三に、玄奘が没した麟徳元年（六六四）以後、まもなく成立した慧立本・彦惊箋『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』十巻は、最初期の玄奘の伝記のひとつである。彦惊の序によれば、前半五巻は貞観年間（六二六～六四九）の末葉、慧立の撰にかかり、これを彦惊がついで後半五巻が垂拱四年（六八八）に成ったという。後半の彦惊撰述部分は玄奘帰朝後のことを述べるので、「仏足石記」本文には関係しない。したがって、この記事に限っていえば、その成立は、さきに第二にあげた『釈迦方志』にさきだつことになる。

なお、ほぼ同時期の成立と目される最古の玄奘伝のひとつ冥祥撰『大唐故三蔵玄奘法師行状』一卷には、「仏足石記」と一致する遺跡の記述はない。

第四に、道宣の法弟にあたる道世撰『法苑珠林』百巻は仏教の一大類書、道宣没後の総章元年（六六八）に成立し、四書のなかでは成立年代が最も新しく、長安西明寺の類聚編纂物の最終的な達成を示すものといえる。

もとより『大唐西域記』は地誌であり、『慈恩伝』は玄奘伝であって、両書の趣旨と性格が根本的に異なるため、その記述の順序・内容には相違するところも少なくない。しかしながら、両書はいずれも玄奘の西域行にもとづき、玄奘が親践あるいは伝聞した西域の情報を踏まえている。『慈恩伝』前半部には原史料として、『大唐西域記』のほか、『大唐西域記』編纂のために玄奘が弁機に提供した『志記』が用いられており、両書は共通の原史料を基盤として成立している。

これに対して、道宣撰『釈迦方志』、道世撰『法苑珠林』は、いずれも長安西明寺菩提院の経蔵に蔵されていた諸書を参看して成ったとされる類聚編纂書である。

『三宝絵』にも引かれる仏足石記事は、『釈迦方志』では遺跡篇、『法苑珠林』では聖迹篇に配置される。その類聚編纂の時点で、道宣・道世が『西域記』『慈恩伝』を参看していたことはうたがいがいないが、その文体からみて、『釈迦方志』『法苑珠林』の記事は『大唐西域記』よりもむしろ、『慈恩伝』の影響が濃厚である。

以上のことから、『三宝絵』上巻序の短小な記事の背後には、『西域記』だけではなく、おなじ記事を掲載する『慈恩伝』『釈迦方志』『法苑珠林』の存在を想定する余地がのこされているとみてよい。すなわち、「薬師寺仏足石記」のみならず、『三宝絵』においても、長安西明寺の知的体系はオントロジというかたちで影を落としていた可能性がある。

さらに、『三宝絵』中巻序には玄奘の名が見え、おなじく『大唐西域記』巻第八摩揭陀國上に依拠する表現がある。

そもそも天竺は仏のあらはれて説きたまひし境、震旦は法の伝はりて弘まれる国なり。この二所を聞くに仏の法やうやうあはてにたるべし。唐の貞観三年に玄奘三蔵の天竺に行きめぐりし時に鶏足山の

古き道には竹茂りて人も通はず。孤独苑のむかしの庭には室失せて僧も住まざりけり。摩竭陁国に往きて菩提樹院を見ればむかしの国王の造れる観音の像あり。身はみな土の底に入りて肩より上わづかに出でたり。

このように『三宝絵』には、奈良朝の「薬師寺仏足石記」にも相通じる状況が、いまだ痕跡をとどめている。『今昔物語集』をはじめとするその他の仏教説話集においても、従来『西域記』の影響とされてきた記事のなかに、長安西明寺の知的体系を継承する表現が隠されている可能性が想定されてよい。

3.『諸経要集』述意縁と『法苑珠林』述意部

『三宝絵』序に「初の巻はむかしの仏の行ひたまへることを明す。種ぐさの経より出したり」とあるように、六波羅蜜を説く『三宝絵』上巻は種々の経典に典拠をもつ。『三宝絵』みずからが説話の結語にあげる出典名は『六度集経』『大智度論』等であるが、六波羅蜜の配列意識と説話の選択には長安西明寺の類聚編纂書『法苑珠林』『諸経要集』の影響が想定される。

『諸経要集』は『法苑珠林』にさきだつ類聚編纂書であり、両者のあいだには一致する記事が多々みうけられる。とりわけ、『諸経要集』述意縁と『法苑珠林』述意部は、六波羅蜜のすべてにわたってまったくの同文である。このことは加筆補訂に積極的な道世が、『諸経要集』述意縁にもとづいて『法苑珠林』述意部を重修するにあたって、述意縁の文章にはほとんど手を加えなかったことを意味する。『諸経要集』述意縁・『法苑珠林』述意部の文章に対して、道世には自負するところがあったのであろう。

表3-1～6は『諸経要集』巻第十におさめる六度部述意縁本文六篇と、『法苑珠林』巻第八十～八五にわたる六度篇第八十五之一～六述意部本文六篇を対照したものである。

これによると、両者の本文はほぼ一致し、異同はほとんどない。

表3-1 『諸經要集』布施篇述意緣と『法苑珠林』布施部述意部

『諸經要集』布施篇第一述意緣第一	『法苑珠林』布施部第一述意部第一
<p>夫布施之業、乃是衆行之源。 既標六度之初、又題四攝之首。 所以給孤獨食[舍1]、散黃金而不吝。 須達拏王、施白象而無惜。 尚能濟其厄難、忘己形軀。 故薩埵投身、以救飢羸之命。 尸毘割股、以代鷹鷂之餐。 豈況國城妻子、何足經懷。 寶貨倉儲、寧容在意。 俗書尚云、解衣推食、摩頭至踵、車馬衣裘、朋友共弊、莫不輕財重義、愛賢好士。 且自財物無常、何關人事。 苦心積聚、竟復何施。 四怖交煎、五家諍奪、何有智人、而當寶翫。比見凡愚、吝惜家財、靡有捨心、而喪軀命。 但為貪生、恒憂不活。 遂使妻兒角目、兄弟鬩牆、眷屬乖離、親朋隔絕。 良由慳因慳緣慳法慳業、乖菩薩之心、妨慈悲之道、不生救護之意、唯起煩惱之情。 如是之愆、寔由慳貪為本也。 (大正藏二一二三／第五四卷 88 a)</p>	<p>夫布施之業、乃是衆行之源。 既標六度之初、又題四攝之首。 所以給孤獨食[園1]、散黃金而不吝。 須達拏王、施白象而無惜。 尚能濟其厄難、忘己形軀。 故薩埵投身、以救飢羸之命。 尸毘割股、以代鷹鷂之餐。 豈況國城妻子、何足經懷。 寶貨倉儲、寧容在意。 俗書[尚]云、解衣推食摩頂至踵、車馬衣裘朋友共弊、莫不輕財重義、愛賢好士。 且自財物無常、何關[開]人事。 苦心積聚、竟復何施。 四怖交煎、五家爭奪、何有智人而當寶翫。 比見凡愚吝惜家財、靡有捨心而喪軀命。 但為貪生常[恒]憂不活。 遂使妻兒角目、兄弟鬩牆、眷屬乖離、親朋隔絕。 良由慳因慳緣慳法慳業、乖菩薩之心、妨慈悲之道、不生救護之意、唯起煩惱之情。 如是之[保/言]、寔由慳貪為本也 (大正藏二一二二／第五三卷 877 c)</p>

表3-2 『諸經要集』持戒篇述意緣と『法苑珠林』持戒部述意部

『諸經要集』持戒篇第二述意緣第一	『法苑珠林』持戒部第二述意部第一
<p>竊聞、戒是人師、道俗咸奉。心為業主、凡聖俱制。 良由三寶所資、四生同潤。 故經曰、「正法住正法滅。意在茲乎。是以持戒為德」。 顯自大經、性善可崇。 明乎大論、或復方之日月、譬若寶珠。義等塗香、事 同惜水。越度大海、號曰牢船。生長善牙、又稱平地。 是以菩薩稟受、微塵不缺。羅漢護持、纖芥無犯。 寧當抱渴而死、不飲水蟲。 乃可被繫而終、無傷草葉。 書云、「立身行道、揚名於後代」。 言行忠信、戰戰兢兢。 豈可放縱心馬、不加轡勒。馳騁情猴、都無制鎖。浮 囊既毀、前路何期。德瓶已破、勝緣長絕。 或復要聚惡人、朋結兇黨、更相扇動、備造愆瑕、無 慚無愧、不差恥、日更增甚。 轉復沈浮、似若葶藶艾蒿。枝葉皆苦、訶梨果樹、遍 體尤甘。 從明入闇、無復出期。劫數既遙、痛傷難忍。 於是鐵湯奔沸、猛氣衝天、鑪炭赫曦、爆聲裂地。 鎔銅灌口、則腹爛肝銷。銅柱逼身、則骨肉俱盡。 宛轉嗚呼、何可言念。如斯等苦、寔由毀戒也 (大正藏二一三／第五四卷 93 c)</p>	<p>竊聞、戒是人師、道俗咸奉。心為業主、凡聖俱制。 良由三寶所資、四生同潤。 故經曰、「正法住正法滅。意在茲乎。是以持戒為德」。 顯自大經、性善可崇。 明乎大論、戒復方之日月、譬若寶珠。義等塗香、事 同惜水。越度大海、號曰牢船。生長善牙、又稱平地。 是以菩薩稟受、微塵不缺。羅漢護持、纖芥無犯。 寧當抱渴而死、弗飲水蟲。 乃可被繫而終、無傷草葉。 書云、「立身行道。揚名於後世」。 言行忠信、戰戰兢兢。 豈可放縱心馬、加轡勒。馳騁情猿、都無制鎖。浮囊 既毀、前路何期。德瓶已破、勝緣長絕。 或復要聚惡人、朋結凶黨、更相扇動、備造愆瑕、無 慚無愧、不差恥、日更增甚。 轉復沈浮、似若葶藶艾蒿。枝葉皆苦、訶梨果樹、遍 體無甘。 從明入闇、無復出期。劫數既遙、痛傷難忍。 於是鐵湯奔沸、猛氣衝天、鑪炭赫曦、爆聲烈地。 鎔銅灌口、則腹爛肝銷。銅柱逼身、則骨肉俱盡。 宛轉嗚呼、何可言念。如斯等苦、寔由毀戒也 (大正藏二一二二／第五三卷 889 c)</p>

表3-3 『諸經要集』忍辱篇述意緣と『法苑珠林』忍辱部述意部

『諸經要集』忍辱篇第三述意緣第一	『法苑珠林』忍辱部第三述意部第一
<p>蓋聞、忍之為德、最是尊上。持戒苦行、所不能及。 是以羈提比丘、被形殘而不恨、忍辱仙主、受割截而 無瞋。 且慈悲之道、救拔為先。菩薩之懷、愍惻為用。 常應遍遊地獄、代其受苦、廣度衆生、施心安樂。 豈容微有觸惱、大生瞋恨。 乃至角眼相看、惡聲厲色、遂加杖木、結恨成怨。 或父子兄弟、自相損害、朋友眷屬、反更侵傷。 惡逆甚於鴟鴞、含毒逾於蜂蠆。 所以歷劫怨讎、生生不絕也。 (大正藏二一三／第五四卷 93 c)</p>	<p>蓋聞、忍之為德、最是尊上。持戒苦行、所不能及。 是以羈提比丘、被刑殘而不恨、忍辱仙主、受割截而 無瞋。 且慈悲之道、救拔為先。菩薩之懷、愍惻為用。 常應遍遊地獄、代其受苦、廣度衆生、施以安樂。 豈容微復觸惱、大生瞋恨。 乃至惡眼出聲、慘顏厲色、遂相捶打、便以杖加。 或父子兄弟、自相損害、朋友眷屬、反更侵傷。 惡逆甚於鴟鴞、含毒逾於蜂蠆。 所以歷劫怨讎、生生不絕也 (大正藏二一二二／第五三卷 889 c)</p>

表3-4 『諸經要集』精進篇述意緣と『法苑珠林』精進部述意部

『諸經要集』精進篇第四述意緣第一	『法苑珠林』精進部第四述意部第一
<p>夫忍行之情猶昧、審的之旨未顯、所以策惰、令心不懈。是故經曰、「汝等比丘、當勤精進。十力慧日、既已潛沒、汝等當為無明所覆」。</p> <p>又言、「闍提之人、屍臥終日、當言成道。無有是處」。釋論云、「在家懈怠失於俗利、出家懶惰喪於法寶。是以斯那勇猛、諸佛稱揚、迦葉精奇、如來述證」。</p> <p>書云、「夙興夜寐、竭力致身」。</p> <p>乃曰。「忠臣、方稱孝子、故知放逸懈怠之所不尚。精進劬勞無時不可。豈得恣其愚懷縱情僞蕩。致使善根種子、不復開敷。道樹枝條、彌加枯萃。況復命屬死。王名繫幽府。奄歸長夜頓罷資糧。冥曹拷問將何酬答、當於此時悔情何及。</p> <p>是故今者。勸諸行人。聞身餘力、預備資糧。常須檢校三業。勿令違於六時。</p> <p>每於晝夜、從旦至中、從中至暮、從暮至夜、從夜至曉、乃至一時一刻、一念一刹那、檢校三業。</p> <p>幾心行善、幾心行惡、幾心行孝、幾心行逆、幾心行厭、離財色心、幾心行貪、著財色心、幾心行人、天善根業、幾心行三塗不善業、幾心厭離名聞著我心、幾心貪求名聞著我心、幾心欣修三乘出世心、幾心輕慢三乘深樂世間心。</p> <p>如是善惡、日夜相違、行者常須檢校、勿令放逸墮於邪網。</p> <p>恒省三業、遞相誠勗、心口相訓、心語口言。</p> <p>汝常說善、莫說非法、口還語心。</p> <p>汝思正法、莫思非法、心復語身。</p> <p>汝勤精進、莫行懈怠。</p> <p>如是我心自制、我口自慎、我身自禁。</p> <p>如是我策、足得高升、何勞他控、橫起怨憎。</p> <p>故經曰、「身行善、口行善、意行善、定生善道。身行惡、口行惡、意行惡、定生惡趣」。</p> <p>又如快馬顧影馳走、不同驚畜加諸杖捶。</p> <p>若不自誠、要假他呵。反增觸惱益罪尤深也。</p> <p>(大正藏二一二三／第五四卷 98 a)</p>	<p>夫忍行之情猶昧、審的之旨未顯、所以策望、令心不懈。是故經曰、「汝等比丘、當勤精進。十力慧日、既已潛沒、汝等當為無明所覆」。</p> <p>又言、「闍提之人、屍臥終日。當言成道、無有是處」。釋論云、「在家懈怠失於俗利。出家懶墮喪於法寶。是以斯那勇猛、諸佛稱揚、迦葉精奇、如來述讚」。</p> <p>書云、「夙興夜寐、竭力致身」。</p> <p>乃曰。「忠臣、方稱孝子。故知放逸懈怠之所不尚。精進劬勞無時不可。豈得恣其愚懷、縱情僞蕩。致使善根種子、不復開敷。道樹枝條、彌加枯瘁。況復命屬死王名繫幽府。奄歸長夜頓罷資糧。冥曹拷問將何酬答、當於此時悔恨何及。</p> <p>是故令者、勸諸行人。聞身餘力、預備前糧。常須檢校三業。勿令違於六時。</p> <p>每於晝夜、從旦至中、從中至暮、從暮至夜、從夜至曉、乃至一時一刻、一念一刹那、檢校三業。</p> <p>幾心行善、幾心行惡、幾心行孝、幾心行逆、幾心行厭、離財色心。幾心行貪、著財色心、幾心行人、天善根業、幾心行三塗不善業、幾心厭離名聞著我心、幾心貪求名聞著我心、幾心欣修三乘出世心、幾心輕慢三乘深樂世間心。</p> <p>如是善惡、日夜相違、行者常須檢校、勿令放逸墮於邪網。</p> <p>常省三業、遞相誠勗、心口相訓、心語口言。</p> <p>汝常說善、莫說非法、口還語心。</p> <p>汝思正法、莫思非法、心復語身。</p> <p>汝勤精進、莫行懈怠。</p> <p>如是我心自制、我口自慎、我身自禁。</p> <p>如是我策、足得高昇、何勞他控、橫起怨憎。</p> <p>故經曰、「身行善、口行善、意行善、定生善道。身行惡、口行惡、意行惡、定生惡趣」。</p> <p>又如駃騠顧影馳走、不同驚畜加諸杖捶。</p> <p>若不自誠、要假他呵。反增觸惱益罪尤深也。</p> <p>(大正藏二一二二／第五三卷 896 c)</p>

表3-5 『諸經要集』禪定篇述意緣と『法苑珠林』禪定部述意部

『諸經要集』禪定篇第五述意緣第一	『法苑珠林』禪定部第五述意部第一
<p>夫神通勝業、非定不生、無漏慧根、非靜不發。 故經云、「深修禪定、得五神通。心在一緣、是三昧相」。 書亦有言、「當使形如枯木、心若死灰、不充屈於富貴、 不隕穫於貧賤、栖神冥漠之內、遺形塵埃之表」。 故攝心一處、便是功德叢林。散意片時、即名煩惱羅刹。 所以曇光釋子、降猛虎於膝前、螺髻仙人、宿巢禽於頂上。 是知、大士常修宴坐、不斷煩惱而入涅槃、不捨道法而現凡夫事。 又能觀察此身、從頭至足、三十六物、八萬戶蟲、不淨無常苦空非我。 但衆生心性、譬若獼猴、戲跳攀緣、歡娛奔逸。 不能冥目束體、端心勤意。剛強難化、[怡-台+龍]戾不調。 習近五塵、流轉三界、黏外道之藕、貫天魔之杖。 於是永淪苦海、長墜嶮獄。 皆由放散情慮、擾亂心神、似風裏之燈、譬波中之月。 搖漾輕動、浮游汎濫、影既不現、照豈得明。 所以衆惡賴此而興、福善由斯併廢。 良由不修斷惑、常起貪瞋、未服無知、偏多樂受。 遂令障定之惑、重沓諍來、妨靜之緣、交加競集。 五蓋覆心、禪門已閉、六塵在念、亂想常馳、類狂象之無鈎、似戲猿之得樹。 故須念念策心、新新集起。 豈前念皆惡、遂剋苦而靜塵。後念起善、便縱意而揚惡。 所以論美四時、經歎一慮、然後方能正想、革絕凡懷。 若違此理、聖亦不可。 今萬境森羅、不能自觸。 要須因倚諸根、內想感發、何以知然。 今有心感於內、事發於外、或緣於外起、染於內心。 故知內外相資、表裏遞用。君臣心識、不可備捨。 故經云、「心王若正、則六臣不邪。識意昏沈、則其主不明」。 今悔六臣、當各慚愧、制馭六根、不令馳散也。 (大正藏二一三／第五四卷 100 a)</p>	<p>夫神通勝業、非定不生、無漏慧根、非靜不發。 故經曰、「深修禪定、得五神通。心在一緣、是三昧相」。 書亦有言、「當使形如枯木、心若死灰、不充[言*屈]於富貴、 不隕穫於貧賤、栖神冥漠之內、遺形塵埃之表。故攝心一處、便是功德叢林。散意片時、即名煩惱羅刹。 所以曇光釋子、降猛虎於漆前。螺髻仙人、宿巢禽於頂上。 是知、大士常修宴坐、不斷煩惱而入涅槃、不捨道法現凡夫事。 又能觀察此身、從頭至足、三十六物、八萬戶蟲、不淨無常苦空非我。 但衆生心性、譬若獼猴、戲跳攀緣、歡娛奔逸。 不能冥目束體、端心勤意。剛強難化、[怡-台+龍]戾不調。 習近五塵、流轉三界、黏外道之藕、貫天魔之杖。 於是永淪苦海、長墜嶮獄。 皆由放散情慮、擾亂心神、似風裏之燈、譬波中之月。 搖漾輕動、浮游汎濫、影既不現、照豈得明。 所以衆惡賴此而興、諸善由斯併廢。 良由不修斷惑、常起貪瞋、未服無知、偏多樂受。 遂令禪定之惑、重沓爭來。妨靜之緣、交加競集。 五蓋覆心、禪門已閉、六塵在念、亂想常馳、類狂象之無鈎、似戲猿之得樹。 故須念念策心、新新集起。 豈前念皆惡、遂剋苦而靜塵。後念起善。便縱意而揚惡。 所以論美四時、經歎一慮、然後方能正想、革絕凡懷。 若違此理、聖亦不可。 今萬境森羅、不能自觸。 要須因倚諸根、內想感發。何以知然。 今有心感於內、事發於外、惑緣於外起染於內。 故知內外相資、表裏遞用。君臣心識、不可備捨。 故經云、「心王若正、則六臣不邪。識意昏沈、則其主不明」。 今悔六臣、當各慚愧、制馭六根、不令馳散也。 (大正藏二一二／第五三卷 901 c)</p>

表3-6 『諸經要集』智慧篇述意緣と『法苑珠林』智慧部述意部

『諸經要集』智慧篇第六述意緣第一	『法苑珠林』智慧部第六述意部第一
<p>夫二種莊嚴、慧名最勝。三品次第、智曰無愚。 故經言、「五度無智、似若愚盲」。 所以般若勝出世間、破除諸有。 釋論又言、「佛是衆生母、波若能生佛。是則智為一切衆生之祖母」。 故外書云、「叡哲欽明、乃稱放勛之德。仁義禮智、方曰宣尼之道」。 當惟智慧之法、不可不修。出世之因、無宜弗習。 能排巨暗、譬滿月之照三途。巧遣眾毒、似摩祇之除萬惡。 豈可任其恒沒、守此長迷。取相交纏、我心縈結。常多有愛、恒富無明。未達因緣、不修對治。 所以鬱鬱慢山、殆高嵩華。滔滔愛水、遂廣滄溟。 或橫執斷常、偏論即離。神黃神白、我見我知。一腳恒翹、五邊長炙。食草學牛、噉糞如犬。 或盛談下諦、寧識中道之宗。 或封執四邊、豈悟大乘之旨。 或謂、「冥初生覺、其外不知。世間定常、唯此為貴」。 或復言、「非有想、是證涅槃」。 計自在天能成世界、愚翫昏瞽、庸昧頑疏。看指求月、守株求兔。薰蕕未辯、寧分菽麥。 雖知歡笑、將[學-子+禺][學-子+禺]而不殊、徒識語言、與狴狴而不異。 良由不識空理、常處無明、凡是倒心、皆名邪見。 五住煩惱、未減一毫。百八使纏、森然尚在。 是故大士、為求八字、不惜軀命。 恐在緣中逢苦即退。故自剋心、以牢其志也。 (大正藏二一二三／第五四卷 101 a)</p>	<p>夫二種莊嚴、慧名最勝。三品次第、智曰無過。 故經言、「五度無智、似若愚盲」。 所以般若勝出世間、破除諸有。 釋論又言、「佛是衆生母、般若能生佛。是則智為一切衆生之祖母」。 故外書云、「叡哲欽明、乃稱放勛之德。仁義禮智、方曰宣尼之道」。 當惟智慧之法、不可不修。出世之因、無宜弗習。 能排巨暗、譬滿月之照三途。巧遣眾毒、似摩祇之除萬惡。 豈可任無常沒、守此長迷。取相交纏、我心縈結。常多有愛、恒富無明。未達因緣、不修對治。 所以鬱鬱慢山、殆高崇華。滔滔愛水、遂廣滄溟。 或橫執斷常、偏論即離。神黃神白、我見我知。一腳常翹、五邊長炙。食草學牛、噉糞如犬。 或盛談下諦、寧識中道之宗。 或封執四章、豈寤大乘之旨。 或謂、「冥初生覺、其永不知。世間定常、唯此為貴」。 或復言、「非有想、是證涅槃」。 計自在天能成世界、愚翫昏瞽、庸魯頑疏、看指求月、守株俟兔。尚疑駝馬、寧分菽麥。 雖知歡笑、將[(學-子+禺)-爻+(与-(乏-之))][(學-子+禺)-爻+(与-(乏-之))]]而不殊、徒識語言、與猩猩而不異。 良由不識空理、常處無明、凡是倒心、皆名邪見。 五住煩惱、未減一毫。百八使纏、森然尚在。 是故大士、為求八字、不惜軀命。 恐在纏中、逢苦即退。故自剋心、以牢其志也。 (大正藏二一二二／第五三卷 907 b)</p>

4.『三宝絵』と『諸経要集』『法苑珠林』の標題

以上、『諸経要集』述意縁と『法苑珠林』述意部のあいだに、ほとんど異同がないことを確認したうえで、つぎに、表4にしたがって『三宝絵』上巻と『諸経要集』『法苑珠林』のオントロジの比較を試みる。

表4

『三宝絵』上巻	『諸経要集』卷第十六度部		『法苑珠林』卷八十～八五六度篇		
	篇（六篇）	縁（施別七縁）	部（六部）	部＋感應縁	
上巻序					
一檀波羅蜜 （尸毘王） 『六度集経』 『智度論』	布施篇第一	述意縁第一 慳偽縁第二 財施縁第三 法施縁第四 量施縁第五 福田縁第六 相對縁第七	布施部第一 （此別十一部）	述意部第一 慳偽部第二 局施部第三 通施部第四 法施部第五 量境部第六 福田部第七 相對部第八 財施部第九 隨喜部第十 施福部第十一	「須達拏王」「薩埵」「尸 毘」 法：佛說太子須大拏經
二持戒波羅蜜 （須陀摩王） 『智度論』	持戒篇第二	述意縁第一 勸持縁第二	持戒部第二 （此別三部）	述意部第一 勸持部第二 引證部第三 感應縁（略引二驗） 梁沙門釋法聰 隋沙門釋法充	
三忍辱波羅蜜 （忍辱仙人） 『大智度論』	忍辱篇第三	述意縁 勸忍縁 忍益縁	忍辱部第三（此 別四部）	述意部第一 勸忍部第二 忍徳部第三 引證部第四	「忍辱仙主」
四精進波羅蜜 （大施太子） 『六度集経』	精進篇第四	述意縁 怠惰縁 策修縁		述意部第一 懈墮部第二 策修部第三	

『三宝絵』上巻	『諸経要集』巻第十六度部		『法苑珠林』巻第八十～八五六度篇		
『報恩経』				進益部第四 感應縁(略引五驗) 晉沙門帛僧光 晉沙門竺曇猷 宋沙門釋僧規 周沙門釋慧景 隋沙門釋曇詢	
五禅定波羅蜜 (正閼梨仙人) 『智度論』	禪定篇第五	述意縁第一 定相縁第二	禪定部第五 (此別五部)	述意部第一 引證部第二 頭陀部第三 利益部第四 禪定部第五 感應縁(略引六驗) 晉沙門支曇蘭 宋沙門釋玄高 宋沙門釋普常 齊沙門釋僧稠 隋沙門釋法進 唐沙門釋慧融	「螺髻仙人」
六般若波羅蜜 (狗賁大臣) 『大論』	智慧篇第六	求法縁第二	智慧部第六 (此別三部)	述意部第一 引證部第二 慧益部第三 感應縁(略引七驗) 晉亭湖神廟經驗 魏沙門釋志湛 唐沙門釋慧因 唐沙門釋慧稜 唐沙門釋法敏 唐沙門釋空藏 唐司元大夫妻蕭氏	
七流水長者 『最勝王経』					
八堅誓師子					

『三宝絵』上巻	『諸経要集』巻第十六度部		『法苑珠林』巻第八十～八五六度篇		
『報恩経』					
九鹿王 『六度集経』					
十雪山童子 『涅槃経』					
十一薩埵王子 『最勝王経』					布施述意
十二須太那太子 『須檀那経』 『六度集経』					布施述意 法：布施部通施部第四 所引
十三施無 『菩薩昧経』 『六度集経』					
讃					

表4から、『三宝絵』上巻一～六の六波羅蜜は、『諸経要集』六度部・『法苑珠林』六度篇に厳密に対応していることが確認される。しかも、上巻七以下の七話のうち、『三宝絵』上巻一「檀波羅蜜」・十二「須太那太子」・十一「薩埵王子」の三話は、六度の冒頭に配される『諸経要集』布施篇述意縁と『法苑珠林』布施部述意部の本文中に人名として掲出される。

第一に、『三宝絵』上一「檀波羅蜜」の「尸毘王」の名は、『諸経要集』布施篇述意縁・『法苑珠林』布施部述意部につきのようにみえる。

尸毘割股、以代鷹鷲之餐。

『三宝絵』「檀波羅蜜」の結語は、出典『六度集経』『大智度論』の書名を明記する。

昔の尸毘王は今の釈迦如来なり。六度集経、智度論等に見えたり。絵あり。

もとより、『三宝絵』「檀波羅蜜」は、『諸経要集』や『法苑珠林』のように、六度部のうち布施波羅蜜に関する説話を類聚する目的をもたない。むしろ、『三宝絵』の特質は既成の類聚編纂書のなかから、もっとも代表的・効果的な説話を一編にかぎって選びだす点にある。

一方、『諸経要集』述意縁・『法苑珠林』述意部は、六度のそれぞれの内容のダイジェストとしての役割になっている。述意縁・述意部とは『諸経要集』六度部・『法苑珠林』六度篇のなかにおさめられた膨大な説話を読み解く際の指針として機能するものであり、『三宝絵』はこの述意縁・述意部にしたがって、そこに掲出される説話を選択したのではなかったか。

それは、神護景雲四年（七七〇）成立の菩提僊那伝『南天竺婆羅門僧正碑并序』の出典の受容のしかたと同じ手法である。やはり長安西明寺の知的体系に属する出典群に依拠する『南天竺婆羅門僧正碑并序』は、

中国高僧名の引用に際して、『梁高僧伝』のダイジェストである「論」「賛」を参看し、そこに掲出される高僧名を引用していた(7)。

出典として依拠し、直接書承する本文とはまた別の次元で、『三宝絵』が説話の選択に際して、『諸経要集』『法苑珠林』全巻のダイジェストとしての「述意」を参看していたのではないか。

さらに、こうした『諸経要集』『法苑珠林』受容の背後には、同じ体系に属する書物として、『大唐西域記』があった。

第二に、『三宝絵』上十二「須太那太子」の名は『諸経要集』布施篇述意縁・『法苑珠林』布施部述意部に確認される。

須達拏王、施白象而無惜、尚能濟其厄難、忘己形軀。

『三宝絵』「須太那太子」の結語は、出典として『太子須檀那經』『六度集經』の名をあげる。

昔の須檀那太子は今の釈迦如来なり。太子須檀那經、六度集經等に見えたり。

しかし、『三宝絵』はその一方で、直後に『西域記』を引用したつぎのような記述を添える。

『西域記』に云ふ、「檀特山の中に率都婆あり。太子のむかし住みし所なり。その辺にまた率都婆あり。

太子の子を授けし所なり。婆羅門の子をえて打ちし時に血流れ土を染めき。今にももろもろの草木みな赤色なり」

出典『大唐西域記』巻第二健駄邏國条にはつぎのようにあり、『三宝絵』が『大唐西域記』を直接に書承したことはあきらかである。

跋婁沙城東北二十餘里至彈多落迦山。嶺上有窰堵波。無憂王所建。蘇達拏太子於此棲隱。其側不遠有窰堵波。太子於此以男女施婆羅門。婆羅門捶其男女流血染地。今諸草木猶帶絳色。巖間石室太子及妃習定之處。谷中林樹垂條若帷。並是太子昔所遊止。其側不遠有一石廬。即古仙人之所居也。

(大正藏第五〇卷)

第三に、『三宝絵』上十一「薩埵王子」の名は、『諸経要集』布施篇述意縁・『法苑珠林』布施部述意部にみえる。

故薩埵投身、以救飢羸之命。

『三宝絵』「薩埵王子」の結語にはつぎのようにあり、出典として『金光明最勝王經』の名をあげる。

むかしの薩埵王子は今の釈迦如来なり。最勝王經に見えたり。天竺のことに注せり。

ここでも同じく、『西域記』を引用したつぎのような記述が添えられる。

『西域記』に云はく、「その所は土も草木も今になほ赤き色なり。血を塗るがごとし。人その辺を踏むに心驚き身ひるむこと荊のさすがごとし。心ある物も心なき物も悲しび痛まずと云ふことなし」と云へり。

出典『大唐西域記』巻第三僧訶捕羅國の条には、つぎのようにある。

從此復還咀叉始羅國北界渡信度河。南東行二百餘里度大石門。昔摩訶薩埵王子。於此投身[飢-几+人]餓烏擇(音徒)。其南百四五十步有石窰堵波。摩訶薩埵餓獸之無力也。行至此地乾竹自刺以血啗之。於是乎獸乃噉焉。其中地土泊諸草木。微帶絳色猶血染也。人履其地若負芒刺。無云疑信莫不悲愴。(大正藏第五〇卷)

なぜ、『三宝絵』は「須太那太子」「薩埵太子」の場合のように、出典とは別に『大唐西域記』を結語に引用するのか。

そこには、長安西明寺知的体系が背後にあって、説話の出典体系として機能しているのではないか。

玄奘生前の成立になる地誌『大唐西域記』、没後まもなく編纂された玄奘伝『慈恩伝』という玄奘にかかわる二書にくわえて、道宣撰『釈迦方志』、道世撰『諸経要集』『法苑珠林』等の類聚編纂書は、長安西明寺周辺に集積された情報、もしくは西明寺経蔵菩提院に収蔵された典籍をもとに、ひとつの「漢」のオントロジと知的体系を形成し、それがまとまりを保ったまま「和」に導入されて、奈良・平安朝を通じてひとつ

の出典体系として機能していたのではなかったか。

いまだ論じ尽くせない問題は山積するが、ここまでの見通しを述べて一応の報告とし、続稿を期することとする。

注

(1) 拙著『奈良朝漢詩文の比較文学的研究』(二〇〇三年七月、翰林書房)

(2) 西明寺創建時の三綱は、従来、『仏祖統記』巻三九に「詔道宣律師為上座、神泰法師為寺主、懷素為維那」とあることから、道宣・神泰・懷素とされてきたが、藤善眞澄氏は西明寺の寺主は神泰ではなく、神察とされる。

(3) 拙稿「長安西明寺の学問と上代漢詩文—大安寺文化圏の出典体系—」(『上代文学』第八九号、二〇〇二年十一月、上代文学会)

(4) 藤善眞澄「晩年の道宣」(『道宣伝の研究』二〇〇三年、京都大学学術出版会)

(5) 同右。

(6) 拙稿「薬師寺「東塔櫓銘」「仏足石記と大安寺文化圏一日中交流」(『国文学』第四八卷第十四号、二〇〇三年十二月、学燈社)

(7) 『梁高僧伝』『論』『賛』とその受容」(拙著『奈良朝漢詩文の比較文学的研究』(二〇〇三年七月、翰林書房)所収)

表1 石田茂作「奈良朝現在一切経疏目録」にみえる玄奘の訳出經典、道宣・道世の著作

(1) 玄奘(六〇二～六六四): 訳出經典七六部一三四七卷

古文書にある經典名	訳述者	巻	記載年	相対位置	開元訳教録の經典名
548 大般若波羅密多經		600	和銅 5	実物	大般若波羅密多經
549 大般若經		600	神亀 4	1-381	大般若波羅密多經
大般若經		600	神亀 4	1-381	大般若波羅密多經
大般若經		600	神亀 5	1-381	大般若波羅密多經
1395 唯識論二卷		10	神亀 5	1-381	成唯識論
1220 弁仲論三卷		3	神亀 5	1-381	弁中辺論
1217 雜集論十六卷		16	神亀 5	1-381	大乘阿毗達磨雜集論
唯識論二卷		10	神亀 5	1-382	成唯識論
大般若經		1	神亀 4	1-382	大般若波羅密多經
553 理趣般若		1	神亀 4	1-382	般若經第五七八卷
大般若經		1	神亀 4	1-383	大般若波羅密多經
大般若經		1	神亀 5	1-382	大般若波羅密多經
1221 弁中辺論		3	天平 3	1-26	弁中辺論
583 心經		1	天平 3	7-20	般若波羅密多大心經
1695 持世陀羅尼一卷		1	天平 3	7-30	持世陀羅尼經
577 金剛般若經六卷		6	天平 4	1-449	能斷金剛般若波羅密多經
1575 藥師經七卷／本願三卷		1	天平 5	7-6	藥師琉璃光如來本願功德經
1574 藥師經七卷／新翻四卷		2	天平 5	7-6	藥師琉璃光如來本願功德經
235 解甚密經五卷		5	天平 5	7-7	解甚密經
57 大菩薩藏經二帙廿卷		20	天平 5	7-7	大乘大菩薩藏經
1222 弁中弁論三卷		3	天平 5	7-8	弁中辺論
又弁中論三卷		3	天平 5	7-8	弁中辺論
143 大乘十輪經十卷		10	天平 5	7-8	大乘大集地持十輪經
1707 八名經一卷紙二		1	天平 5	7-8	八名普密陀羅尼經
1621 大乘十一面經一卷		1	天平 5	7-19	十一面神呪經
226 无垢称經六卷		6	天平 5	7-19	説无垢称經
1706 八名普密陀羅尼經一卷		1	天平 5	7-19	八名普密陀羅尼經
无垢称經六卷		6	天平 5	7-19	説无垢称經
无垢称經六卷		6	天平 6	7-21	説无垢称經
554 理趣經		1	天平 6	7-21	般若經
歸瑜伽論十卷		100	天平 7	7-22	瑜伽師地論
1241 五蘊論一卷		1	天平 7	7-23	大乘五蘊論
1206 瑜伽論		100	天平 7	7-39	瑜伽師地論
藥師經一卷		1			
新翻藥師經四卷		1	天平?	7-25	藥師琉璃光如來本願功德經
本願藥師經三卷					
1253 觀所緣々論		1	天平 8	2-511	觀所緣々論
理趣經一卷		1	天平?	7-25	般若經

古文書にある經典名	訳述者	巻	記載年	相対文相	開元釈教録の經典名
552 曼殊室利分二巻		2	天平 8 7-25	同。右、為内親王御写。	般若經第七会、室羅夜城給孤提國說曼殊室利分
550 那伽室理分一卷		1	天平 8 7-25	同	大般若波羅密多經第八會、室羅夜城給孤提國說
1720 不空羼索經一卷		1	天平 8 7-26	同	不空羼索神呪心經
本願藥師經一卷		1	天平 8 7-26	同	
新翻藥師經二巻		2	天平 8 7-26	同	
持世陀羅尼一卷		1	天平 3 7-57	「天平八年九月二十九日写經目錄」天平	持世陀羅尼經
1334 寂照神變經一卷三摩地		1	天平 8 7-57	八年十一月廿四日高屋赤万呂	寂照神變三摩地經
577 能断金剛般若經一卷		1	天平 8 7-57	同	能断金剛般若波羅密多經
434 縁起聖道經一卷		1	天平 8 7-59	同	縁起聖道經
402 如來示教經一勝軍		1	天平 8 7-59	同	如來示教將軍王經
662 十二縁起經一卷		1	天平 9 7-61	同。天平九年二月廿日高屋明万呂	縁起經
1445 界身足論三巻		3	天平 9 7-63	同。天平九年二月廿八日高屋明万呂	阿毗達磨界身足論
1305 大乘掌珍論		2	天平 9 7-63	同	大乘掌珍論
1238 大乘成業論		1	天平 9 7-64	同	大乘成業論
1280 広百論本一		1	天平 9 7-64	同	広百論本
478 最無比經一卷		1	天平 9 7-65	同	最無比經
463 甚希有經		1	天平 9 7-65	同	甚希有經
447 称讃大乘功德經		1	天平 9 7-65	同	称讃大乘功德經
1742 呪五首		不明	天平 9 7-65	同	能滅衆罪千転陀羅尼經
1622 十一面神呪經		1	天平 9 1-69	?	十一面神呪經
唯識論十巻		10	天平 9 7-26	九年正月。九年廿八日付山口東人内通大藏万呂	
1382 摂論十巻?		10	天平 9 7-26	右為人給写。右、為安宿宅沙弥等写給	摂大乘論釈
240 仏地經一卷		1	天平 9 7-66	天平九年三月四日高屋赤万呂	仏地經
八名普密陀羅尼一卷		1	天平 9 7-66	同	八名普密陀羅尼經
192 受持七仏名号所生功[徳]經一卷		1	天平 9 7-67	同	受持七仏名号所生功德經
金剛般若經一卷		1	天平 9 7-67	同	能断金剛般若波羅密多經
1698 六門陀羅尼經一卷		1	天平 9 7-67	同	六門陀羅尼經
1247 因明入正論		1	天平 9 7-69	未勘。天平九年三月十二日赤万呂	因明入正理論
1680 拔濟苦難陀羅尼經一		1	天平 9 7-71	以上經未送抄了。天平九年三月十二日赤万呂	拔濟苦難陀羅尼經
能断金剛般若二巻		2	天平 9 7-75	三月二日赤万呂	能断金剛般若波羅密多經
808 仏臨涅槃記法住經		1	天平 9 7-75	同	仏臨涅槃記法住經
諸仏心陀羅尼一卷		1	天平 9 7-76	右三經自西宅請 和上所	諸仏心陀羅尼經
1403 広百論一部十巻		10	天平 9 7-76	四月二日赤万呂	大乘広百論釈論
大乘五蘊論一卷		1	天平 9 7-76	同	大乘五蘊論
1249 大乘百法明門論一卷		1	天平 9 7-76	同	大乘百法明門論
1212 顕揚聖教論十巻		10	天平 9 7-77	四月三日赤万呂	顕揚聖教論
1420 発智論		20	天平 9 7-77	四月四日赤万呂	阿毗達磨発智論
1224 摂大乘論本三巻		3	天平 9 7-79	四月十日赤万呂	摂大乘論本
1700 勝幢臂印陀羅尼一卷		1	天平 9 7-81	四月廿九日赤万呂	勝幢臂印陀羅尼經
663 縁起經二巻		2	天平 10 7-81		縁起經
摂大乘釈論八巻		8	天平 9 7-81	同。十四年十月留第七巻	
摂大乘論十巻釈論		10	天平 9 7-81	同。留在/十四年十月送	
摂大乘論三巻?		3	天平 9 7-81	同。欠十巻今送*「疑■不」	
大乘雜集論十巻?		10	天平 9 7-81	同	大乘阿毗達磨雜集論
1215 阿毗達磨集論七巻		7	天平 9 7-82	同	大乘阿毗達磨集論
1381 瑜伽師地論釈一卷		1	天平 9 7-83	同	瑜伽師地論釈

古文書にある經典名	訳述者	巻	記載年	相本註	開元訳教録の經典名
1442 阿毗達磨識身足論十五卷「六		15	天平 9	7-83 九年十二月四日赤万呂	阿毘達磨識身足論
793 本事經七卷		7	天平 10	7-108 「經師充經帳」八月廿五日登美加是充	本事經
1417 法蘊足論一卷		1	天平 10	7-108 經	阿毗達磨法蘊足論
弁中論三卷		3	天平 10	7-108 同	弁中毘論
諸仏心陀羅尼一卷		1	天平 10	7-108 同	諸仏心陀羅尼經
1213 顯揚論十卷		10	天平 10	7-110 六月七日道守味當受經	顯揚聖教論
法温足論四卷		4	天平 10	7-110 同	阿毗達磨界身足論
1444 阿毘達磨界身足論		3	天平 10	7-110 ?	阿毗達磨界身足論
1418 一切有部法温足論七卷		7	天平 10	7-111 八月八日充右澆	阿毗達磨法蘊足論
十一面經一卷		1	天平 10	7-112 八月廿六日充道守經	
能断金剛般若一卷		1	天平 10	7-112 八月廿八日充道守	能断金剛般若波羅密多經
八名普密陀羅尼經一卷		1	天平 10	7-113 八月廿五日充	八名普密陀羅尼經
因明入正理論一卷		1	天平 10	7-114 八月廿八日	因明入正理論
1351 仏地論		7	天平 10	1-214 ?	仏地經論
1440 顯宗論		37	天平 10	7-22 ?	阿毗達磨藏顯宗論
551 那伽室利般若經		1	天平 10	7-126 ?	能断金剛般若波羅密多經
能断般若經一百卷		100	天平 10	7-112 「經師所解」天平十年二月七日小野国方	能断金剛般若波羅密多經
不空羼索經二卷?		2	天平 10	7-125	不空羼索神呪心經
十一面經二卷		2	天平 10	7-125	
能断般若經一百卷		100	天平 10	7-126 天平十年二月八日始写經	
十一面經二卷		2	天平 10	7-126 同	
不空羼索經二卷?		2	天平 10	7-126 同	不空羼索神呪心經
大波若經一部六百卷		600	天平 10	7-166 「僧慈訓大般若經奉讀狀」天平十年三月十一日(隱)「山科寺」(隱)「所謂内堂」	
无垢称經六卷帙一		6	天平 11	7-172 「写經司雜受書并進書案及返書」写經司 奉讀本經事。以前本經、本所還送已訖、顯注如前、天平十年間於般藏人秦万呂/舍人市原王/辛国人成	説無垢称經
大般若經六百卷		600	天平 10	7-173 「写經司解 申請經師等食料事」応写大般若經六百卷	
144 大集地蔵十輪經		10	天平 10	7-175	大乘大集地蔵十輪經
1721 不空羼索神呪心經		1	天平 10	7-191	不空羼索神呪心經
584 般若波羅密多心經		1	天平 10	7-203	般若波羅密多心經
145 大乘輪經		10	天平 10	7-206	大乘大集地蔵十輪經
110 称讃浄土經		1	天平 10	7-216	称讃浄土仏摂受經
1437 順正理論		79	天平 10	7-221	阿毗達磨順正理論
146 大乘地蔵十輪經		10	天平 11	7-87	大乘大集地蔵十輪經
2806 大唐西域記		12	天平 11	7-87	大唐西域記
2801 大唐三蔵法師伝		10	天平 11	7-87	大唐大慈恩寺三蔵法師伝
2802 慈恩寺三蔵法師	不明	天平 11	7-405		大唐大慈恩寺三蔵法師伝
2803 大慈恩寺三蔵法師伝		10	天平 11	7-320	大唐大慈恩寺三蔵法師伝
2807 西域記伝		12	天平 12	1-490 ?	大唐西域記
1438 順正論		79	天平 12	7-89	阿毗達磨順正理論
1431 俱舍論		30	天平 12	7-488	阿毘達磨俱舍論
1457 五事論		2	天平 12	7-490	五事毘婆沙論

古文書にある經典名	訳述者	巻	記載年	和名	開元釈教録の經典名
1456 入阿毗達磨論		2	天平 12	8-124	入阿毗達磨論
1429 大毘婆沙論		200	天平 13	2-303	阿毘達磨大毘婆沙論
867 天請問經		1	天平 13	7-210	天請問經
14 顯無辺仏土經		1	天平 14	2-310	顯無辺仏土功德經
1250 百法論		1	天平 14	2-320	大乘百法明門論
111 称讃仏摂受經		1	天平 14	8-6	称讃浄土仏摂受經
1482 異部執論		1	天平 14	8-89	異部宗輪論
1458 五事毗婆沙論		2	天平 14	8-90	五事毘婆沙論
1443 識身足論		不明	天平 14	8-90	阿毘達磨識身足論
1432 説一切有俱舍論		第七	天平 14	8-98	阿毘達磨俱舍論
112 称讃浄土仏摂受經		1	天平 15	8-166	称讃浄土仏摂受經
227 説無垢称經		不明	天平 15	8-210	説無垢称經
1396 聲唯識論		9	天平 15	8-377	成唯識論
403 如来味教勝王經		1	天平 18	9-282	潤九月「写經紙数注文」「雜帙内合八巻在周紙廿 如来味教勝王經 八仏名号經 文殊師利菩薩行經 龍王經」 如来示教將軍王經
1056 菩薩戒羯磨文		不明	天平 19	7-67	菩薩戒羯磨文
1573 諸仏心陀羅尼經		1	天平 19	7-76	諸仏心陀羅尼經
阿毗達磨界身足論三巻 三藏玄奘	三藏玄奘	1	天平 19	9-392	六月七日「写經所解 申見所写并未写疏等」(已上百十七巻論紙[用]九巻大乘/八十八[?]七[?]巻)
1243 因明正理論本一卷	玄奘	1	天平 19	9-392	同
56 別章大菩薩藏經第二帙 照臨/五藏		10	天平 19	9-493	十月廿一日「写一切經師手実帳・次田正日手実」写經二帙「十二巻」合
1235 二十唯識論		1	天平 20	3-84	唯識二十論
1392 无性摂論		120	天平 20	3-84	摂大乘論釈
1239 成業論		1	天平 20	4-10	大乘成業論
1393 大乘無性菩薩釈論		第四	天平 20	10-156	摂大乘論釈
1060 菩薩戒本		1	天平 20	10-323	菩薩戒本
仏地經		1	天平 20	10-381	仏地經
諸仏心陀羅尼經		1	天平 20	10-381	諸仏心陀羅尼經
拔除苦難陀羅尼經		不明	天平 20	10-381	拔除苦難陀羅尼經
持世陀羅尼經		不明	天平 20	10-381	持世陀羅尼經
仏臨涅槃記法住經		1	天平 20	10-381	仏臨涅槃記法住經
受持七仏名号功德經		1	天平 20	10-381	受持七仏名号功德經
寂照神変三摩地經		1	天平 20	10-381	寂照神変三摩地經
本事經		7	天平 20	10-382	本事經
天請問經		1	天平 20	10-382	天請問經
縁起經		1	天平 20	10-382	縁起經
解深密經			天平 20	10-383	解深密經
439 分別縁起經		2	天平 20	10-383	分別縁起經初勝法門經
甚希有經		1	天平 20	10-383	甚希有經
最无比經		1	天平 20	10-383	最无比經
称讃大乘功德經		1	天平 20	10-383	称讃大乘功德經
404 如来示教將軍王經		1	天平 20	10-383	如来示教將軍王經

古文書にある經典名	訳述者	巻	記載年	相本註釋	開元訳教録の經典名
縁起聖道經 呪五首經 頭無辺仏土功德經		1 1 1	天平 20 天平 20 天平 20	10-383 10-383 24-168	縁起聖道經 呪五首經 頭無辺仏土功德經
1352 仏地經論 2804 唐慈恩寺三蔵法師伝		7 10	勝宝元 勝宝元	3-353 11-227	仏地經論 大唐大慈恩寺三蔵法師伝
1251 明門論		1	勝宝 2	11-225	大乘百法明門論
580 能断般若經 1383 摂大乘論釈十巻 1394 摂大乘論釈十巻 1236 唯識二十論一卷 1237 唯識三十論 1242 大乘五蘊論一卷 1211 王法正理論一卷 1413 集異門足論廿巻 1446 品類足論十八巻	玄奘訳 玄奘訳 玄奘訳 玄奘訳 玄奘訳 玄奘訳 玄奘訳 玄奘訳	1 10 10 1 1 1 1 20 18	勝宝 3 勝宝 3 勝宝 3 勝宝 3 勝宝 3 勝宝 3 勝宝 3 勝宝 3 勝宝 3	3-554 12-44 12-44 12-46 12-46 12-46 12-48 12-179 12-179	能断金剛般若波羅密多經 摂大乘論釈 摂大乘論釈 唯識二十論 唯識三十論頌 大乘五蘊論 王法正理論 阿毗達磨集異門足論 阿毘達磨品類足論
15 頭無辺仏土功德經一卷		1	勝宝 4	12-262	「三年七月廿七日右奉請講師慈訓師所」 頭無辺仏土功德經
2805 慈恩寺三蔵法師伝 1623 十一面經 16 花嚴經壽命品	玄奘訳	10 1 1	勝宝 5 勝宝 5 勝宝 5	3-653 12-440 13-40	大唐大慈恩寺三蔵法師伝 十一面神呪經 頭無辺仏土功德經
1214 頭揚聖教論頌 1414 阿毗達磨集異門足論分 1447 阿毘達磨品類足論 1542 勝宗十句義論分 1541 勝宗十句義論		1 20 18 1 1	勝宝 6 勝宝 6 勝宝 6 勝宝 6 勝宝 6	4-497 4-498 4-498 4-498 15-45	頭揚聖教論頌 阿毗達磨集異門足論 阿毘達磨品類足論 勝宗十句義論 勝宗十句義論
440 分別縁起經初勝法門經		2	勝宝 7	13-128	分別縁起經初勝法門經
1252 大乘百法明門論本事品 中略録名数一卷		1	景雲 2	17-127	神護景雲二年十二月二十日「造東大寺司牒 奉写一切經司」右五十三巻、水主内親王經内之、 大乘百法明門論
585 心般若經 1422 一切有部発智大毗婆沙論		1 10	宝亀 3 宝亀 4	20-267 20-397	般若波羅密多大心經 阿毗達磨発智論？
1216 大乘阿毗達磨集論 1218 大乘阿毗達磨雜集論 1219 弁中辺論頌 1404 大乘広百論釈論十巻 1402 大乘広百論釈		7 16 1 10 10	不詳 不詳 不詳 不詳 不詳	8-528 8-592 8-530 17-74 8-529	大乘阿毗達磨集論 大乘阿毗達磨雜集論 弁中辺論頌 大乘広百論釈論 大乘広百論釈論

古文書にある經典名	訳述者	巻	記載年	相結文	開元釈教録の經典名
1421 阿毗達磨発智論二十巻		20	不詳	12-156 勝宝三年九月廿日類収「俱舍衆写書布	阿毗達磨発智論
1419 阿毗達磨法蘊足論十二巻		12	不詳	12-156 施勘定帳」小乗論	阿毗達磨法蘊足論
1430 阿毘達磨大毗婆沙論		200	不詳	12-157 同ほかにもありそう	阿毘達磨大毗婆沙論
1433 阿毗達磨俱舍論		30	不詳	12-157 同	阿毘達磨俱舍論
1439 阿毗達磨順正理論		80	不詳	12-158 同	阿毗達磨順正理論
1436 阿毗達磨俱舍論本頌		1	不詳	12-157 同	阿毗達磨俱舍論本頌
1441 阿毘達磨藏頭宗論		40	不詳	12-158 同	阿毗達磨藏頭宗論
本事經七巻		7	不詳	12-208 勝宝四年正月二五日類収「応写経目錄」	本事經
分別縁起初勝法門經二巻		2	不詳	12-208 同ほかにもありそう	分別縁起初勝法門經
称讃七仏名功德經		1	不詳	12-208 同	受持七仏名号所生功德經
仏地經一卷		1	不詳	12-208 同	仏地經
能断金剛般若經？					
404 縁起聖道經一卷		1	不詳	12-208 同	縁起聖道經
如来示教將軍王經一卷		1	不詳	12-208 同	如来示教將軍王經
称讃浄土經一卷？			不詳	12-208 同	
称讃大乘功德經一卷		1	不詳	12-208 同	称讃大乘功德經
頭無辺仏土功德經一卷		1	不詳	12-208 同	頭無辺仏土功德經
諸仏心陀羅尼經一卷		1	不詳	12-208 同	諸仏心陀羅尼經
拔済苦難陀羅尼經一卷		不明	不詳	12-208 同	拔除苦難陀羅尼經
持世陀羅尼經一卷		不明	不詳	12-208 同	持世陀羅尼經
称讃七仏名功德經一卷		1	不詳	12-208 同	受持七仏名号功德經？
記法住經一卷		1	不詳	12-208 同	仏臨涅槃記法住經
寂照神变三摩地經一卷		1	不詳	12-208 同	寂照神变三摩地經
1511 大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記一卷幀		1	不詳	9-394 六月七日「写経所解 申見所写并未写疏等」(已上百八十四巻疏比十四巻大乗/十巻小乗)	大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記
1576 薬師瑠璃光如来本願功德經		1	不詳	12-58 ?	薬師瑠璃光如来本願功德經
1057 菩薩羯磨		1	不詳	19-61 ?	菩薩戒羯磨文？

(2) 西明寺上座道宣(五九六～六六七)著作三五部一八八卷

2280 四分羯磨疏		1	天平 2	3-87		四分剛補隨機羯磨疏
2850 大唐內典錄十卷		10	天平 9	7-82	九年四月廿九日赤万呂。改送。	大唐內典錄
2821 感通錄二卷 <small>欠一</small>		2	天平 9	7-83	九年十二月四日赤万呂	感通錄
2851 大唐內典二卷		2	天平 9	7-109	八月廿六日充登美經	大唐內典錄
2822 集神州三宝感通錄三卷		3	天平 10	7-113	八月廿五日充	集神州三宝感通錄
2797 統高僧伝		30	天平 11	7-87		統高僧伝
2825 広弘明集		30	天平 11	7-87		広弘明集
1091 四分律剛補隨機羯磨		1	天平 11	7-85		四分律剛補隨機羯磨
2253 四分律剛繁補闕行事鈔		第二	天平 15	8-347		四分律剛繁補闕行事鈔
2257 六卷鈔	宣律師	6	天平 15	8-206		四分律剛繁補闕行事鈔
2254 四分律行事鈔六卷 <small>節略</small>	宣師者	6	天平 16	12-177	東大寺律宗牒「律宗牒。奉請經律論抄疏合拾伍部老伯捌拾捌卷」	四分律剛繁補闕行事鈔
1083 新述刪定四分戒本 四分律行事鈔六卷 <small>附註</small>	釈道宣師	1 6	天平 19	2-713 9-876	六月七日「写經所解 申見所写并未写疏等」(已上卅七卷律疏 <small>附註</small>)	新刪定四分僧戒本 四分律剛繁補闕行事鈔
広弘明集卅卷 <small>附註</small>	釈門 <small>附註</small>	4	天平 19	9-393	同(已上卅卷集 <small>附註</small> /計三卷 <small>附註</small>)	広弘明集
集古今仏道論衡四卷 <small>附註</small>		4	天平 19	9-393	同(已上八百八十四卷疏 <small>附註</small> /計四卷 <small>附註</small> /十卷 <small>附註</small>)	集古今仏道論衡
釈迦氏略譜一卷 <small>附註</small>		1	天平 19	9-394	同	釈迦氏略譜
釈迦方志二卷 <small>附註</small>		2	天平 19	9-394	同	釈迦方志
統大唐內典錄一卷		1	天平 19	9-394	同(已上卅四卷目錄並小乘)	統大唐內典錄
大唐內典錄十卷 <small>附註</small>	釈門 <small>附註</small>	10	天平 19	9-394	同	大唐內典錄
2852 內典序		1	天平 20	3-83		大唐內典錄
大唐內典錄十卷 <small>西明寺牒</small>	西明寺 <small>附註</small>	10	勝宝 3	12-60	勝宝三年九月廿日「写書布施勘定帳・伝集章」二百八十五枚	大唐內典錄
広弘明集三十卷		30	勝宝 3	12-60	同九百五十三枚	広弘明集
統高僧伝卅卷		30	勝宝 3	12-60	同八百五十六枚	統高僧伝
2823 東夏三宝感通錄三卷		3	勝宝 3	12-60	同百十六枚	集神州三宝感通錄
釈迦氏毗[略]譜一卷 <small>附註</small>		1	不詳	12-216	勝宝四年正月二五日類集「可謂本目錄」	釈迦氏譜
釈迦方志二卷		2	不詳	12-216	同	釈迦方志
2853 統大唐內典錄一卷		1	不詳	12-216	同	統大唐內典錄
2870 集古今仏道論衡四卷 <small>附註</small>		4	不詳	12-216	同	集古今仏道論衡
2800 釈迦氏略譜一卷 <small>附註</small>		1	不詳	12-562	勝宝五年五月七日類収「未写經律論集目錄」卅三紙	釈迦氏譜
2798 釈迦方志二卷		2	不詳	12-562	同八十四紙	釈迦方志
大唐內典錄十卷 <small>附註</small>		10	不詳	12-562	同	大唐內典錄
統大唐內典錄一卷		1	不詳	12-562	同	統大唐內典錄
2259 關中創立戒壇図	宣師	1	勝宝 6	東征伝		關中創立戒壇図經
2252 含注戒本	宣師	1	勝宝 6	東征伝		四分律含注戒本
2255 四分律行事鈔	宣師	6	不詳	16-406		四分律剛繁補闕行事鈔

その他：四分律拾毗尼義鈔六卷（現十二卷）・四分律比丘含注戒本疏三卷（現六卷）・四分律剛補隨機・羯磨疏二卷・四分律含注戒本疏三卷・量所輕重儀二卷・尼注戒本一卷・比丘尼鈔六卷（現六卷）・羯磨一卷→二卷・羯磨疏二卷→四卷（現八卷）・釈門章服儀一卷・釈門歸敬儀一卷・律相感通伝一卷・中天竺舍衛國祇洹寺図經二卷（現一卷）・中天竺舍衛國祇洹寺図經付囑儀十卷・妙法蓮華經義苑三十卷・浄心誠觀法二卷・南山靈感伝二卷・輕重采英記二卷・教誡新学比丘行護律儀一卷・刪定尼戒本一卷・見行要鈔一卷・毗尼行要鈔一卷・行事略鈔一卷・六時礼仏懺悔儀一卷・釈門集僧軌度図一卷

(3) 道世(玄儔)(?～六八三): 著作十二部一五六卷

2284 毗尼討要		3	天平 15	8-212	「一切經間校帳」十八年二月四日、毗尼討要卷上本用廿八、一〇五〇/二、已詳研	毗尼討要(四分律討要)
2829 諸經要集廿卷 <small>小乗</small>		20	天平 19	9-393	六月七日「写經所解 申見所写并未写疏等」(已上百卅卷集 <small>諸經要集</small> /計三 <small>卷</small>)	諸經要集、道宣述道世撰
大乘修行菩薩行門諸經要集三卷 <small>小乗</small>	?	3	天平 19	9-393	同	大乘修行菩薩行門諸經要集
三卷鈔六卷	玄儔 <small>師</small> 撰	6	天平 19	9-386	同「三卷鈔六卷和毗尼律/經論」(已上卅七卷律 <small>論</small>)	毗尼討要
2826 毗尼討要一部六卷基撰	基撰	6	景雲 2	17-87	八月二日「造東大寺司移奉写一切經司」	毗尼討要
諸經要集二十卷		20	不詳	12-216	勝宝四年正月二五日類収「可謂本目錄」	諸經要集
諸經要集二十卷		20	不詳	12-562	勝宝五年五月七日類収「未写經律論集目錄」五百八十二紙	諸經要集
2825 毗尼討要	沙門釈玄儔 <small>基</small> 撰	6	不明	16-406		毗尼討要

その他: 法苑珠林一百卷(現存)。金剛般若集註三卷・四分律尼鈔五卷・大小乘禪門觀十卷・受戒儀式四卷・礼仏儀式二卷・敬福論三卷・大乘略止観一卷・弁偽頭真論一卷・百願文一卷